



山本信太郎が語る 「ニューラテンクォーター」の光と影 元ニューラテンクォーターオーナー 山本 信太郎様

福岡生まれ、昭和33年に東京へ来ました。「東京へ行くなら日本一になって帰ってこい」と、父がたった一言、僕を激励して東京へ送り出したのを覚えております。

昭和33～34年当時、東京へ行くことが唯一の憧れでした。アメリカ進駐軍から福岡に2軒のアメリカ人専用のキャバレーを作るということが許され、父が九州でキャバレーを始めました。私は小学生でしたので見に行きたくても許されず、小学6年生の時にちらっと見に行ったことがありました。大学も東京へ行きたかったのですが福岡へ行け、と言われ、福岡大学をぎりぎり出ました。昭和33年に東京に来て、34年12月に赤坂の地にニューラテンクォーターをオープンしました。

元々ラテンクォーターというクラブがあったのですが私がオープンする前に火事で焼けてしまいました。ロッキード事件でいろいろ話題になっている児玉誉士夫氏がそのラテンクォーターに関係されていて、旧ラテンクォーターで生計を立てていた人達が生活していけないと児玉先生のところに押し掛けたいです。児玉先生もラテンクォーターを作らなければいけない、誰がいいだろうかということで父を指名したのですが自身では行かず私に「行ってこい」と言い、それがきっかけで、24歳で東京へ来ました。

昭和34年、ある日児玉先生に呼ばれて、藤山愛一郎氏がホテルニュージャパンというのを作らしたい、ホテルの横にキャバレーのネオンが映ってはいけないから地下へ潜るようにと指示を受けました。急遽ホテルの脇に地下を掘り、作って出来上がったのが「ニューラテンクォーター」です。怪我の功名ではないですが地下へ潜ったことで、赤い階段をずっと地下へ降りていく何ともいえない雰囲気、非常にお客様喜ばれました。

「日本一になれ」という父の言葉が耳に残っていて日本一になるにはどうしたらいいのだろうと思案していました。ラテンクォーターの場合、箱が大きくテーブルは80席程度ですが約390坪ありますので、どういってお店作りをすればいいんだろうかと思っているときに、キョードー東京の創始者である永島達司氏が声をかけてくれました。日本一のクラブを作りたいが思案していることを伝えると、将校クラブへいろんなSHOWを外客慰問のために呼んでいるので1回見てみませんか誘っていただき、一緒に将校クラブへ行き、外人のSHOWを見たことが、クラブ作りのきっかけとなりました。ラテンクォーターがオープンするとき、ベサメ・ムーチョが流行している時で、ベサメ・ムーチョを歌っているトリオ・ロス・パンチョスを、ラテンクォーターの柿落として呼びました。12月10日がレセプションで、11日が一般営業でしたが、トリオ・ロス・パンチョスが来て、初めて生を見る機会にお客様が喜んでくださり、それがきっかけとなりラテンクォーターにSHOWが外せなくなりました。次々にいろんなタレント、

外国のタレントを呼ぶ機会を得ましたが、キョードー東京も同時に一緒に大きくなっていきました。学生時代音楽が好きで、テネシーワルツ、どういう人が歌っているのだろうと、その歌っているパティ・ページが実際に来て、ラテンクォーター入ってきたときはとても嬉しく、あの感激は忘れられません。ラテンクォーターが閉店するまでの30年間、SHOWを1日もかかずことなくやってこられたことが、ニューラテンクォーターがレジェンドとなり、今でも皆さんにあのSHOWはよかったねって言うだけであります。やってきてよかったなと思っています。

当時のお客様は、昭和33～34年はオリンピック前で商社の三菱商事、三井物産、伊藤忠、日商岩井、各商社の外国のお客様の招待で毎晩賑わっていました。今も大事にしているのが、松本清張氏が「人の出会いと触れ合いを特に大事に下さい」と言われたことがずっと今も残っています。人と出会うことを大事にして人と触れ合うことの難しさということも身を持って感じています。経済界でお見えにならなかったのは、松下幸之助氏だけで、当時の有名な経済界、財界、総理の方々もお見えになりました。一番回数が多いのは中曽根氏でした。福田武夫氏は、几帳面な方でした。店の住所は永田町で、麹町管内、永田町管内では、風俗営業のお店はラテンクォーターだけしかないのでから間違えたらだめだよ、といつも麹町署の署長に呼ばれていました。歴代麹町署長とも大変親しくしていただけていました。

そのあと、ホテルニュージャパンが火事になり、火事の後何年かやりましたが雰囲気が出ず、1989年にニューラテンクォーター30年で辞めました。立退料が入り福岡へ帰ってのんびりしようと思っていたのですが、従業員が働きたいと言っているということで、赤坂9丁目のニューペントハウスを開き、15年間65歳までやりました。ペントハウスも終わり、次何しようかと思っているときに、私の友人がやっているキックボクシングを見に行き、なかなか面白く、女子でもできるのではないかと思い、女子格闘技のキックボクシングの会を作りました。キックボクシングの方も5年間楽しくやらせてもらいました。キックボクシングもやめて、何しようかなと思っているときに、当時お世話になっていた廣済堂の桜井会長から、ラテンクォーターの本を書くように勧められ、「東京アンダーナイト」という本を70歳の時に出版しました。お蔭様で88歳になりますが、この年まで退屈することなく次から次にそういうお話がきて、いろんな方とお会いすることができて、ほんとに元気にしております。これも、松本清張先生の言葉の、人の出会いと触れ合いが、今日までそういう気持ち、体力はもちろんですけど気持ちが落ちないとか、衰えないとか、いつもそういう気持ちで人と接することができるということが今日のこの場にも繋がっていると思って、感謝しながらこうして立たしてもらっていただいております。

昭和34年東京オリンピックの前、本当に大変でした。公安委員会に呼ばれ、外国のお客様が来た時にどうい
うメニューで、どうい
う料理を、どうい
う商売をするのか
ということで、メニューのチェックから、見本をラテン
クォーターでやってくださいと、あの当時公安委員に何
回も行
ってチェックを受けました。外国のお客様には、
お客様のオーダーしたものだけしか出さないようにして
くれ、と、全部伝票も別々で、飲み物、女の子の伝票、
食べ物も全部伝票でお客様が理解できるようにしなさい
と。東京オリンピックの頃は、そういう細かい神経を使
って商売をしたな、と今でもオリンピックをやっている
と、それを思い出します。あのころ結構神経質に商売や
っていたなと思
いながら、今もオリンピックで毎日楽し
みながらオリンピックを見
ています。
今日こうやって皆さんとお会いできてこういうお話をさ
せていただくこと大変嬉しく思
っております。本日はあ
りがとうございました。

